自主性を育むキャリア教育

京都教育大学大学院　連合教職実践研究科
教職実践専攻　生徒指導力高度化コース
学籍番号 116031　石田　聡

自主性を育むキャリア教育

石田　聡
生徒指導力高度化コース

要約：子どもたちが育つ社会環境は常に変化しており、多様化し、複雑になっている。自分の将来を考えることが困難になり、やりたいことが見つからない、という高校生をどのように指導していけばよいかについて埼玉県立浦和高等学校で実践されている事例を挙げ、その効果と改善策、今後の高等学校でどのような取組をしていけばよいかを考察していく。

キーワード：キャリア教育、高大連携、進路指導、学習カウンセリング

１．はじめに

(1) 研究の目的・設定動機

教職専門実習Ⅱで、高等学校で実践されている模擬裁判の活動に参加させていただいたが、生徒が自ら参加し、『本物』の社会に触れるという体験は生徒が将来を考えるうえで有用な材料となることを感じた。また、自分の意思で決定し活動に参加している生徒たちはとても意欲的で、とても効果的な活動だと考えた。このような教育を高等学校で行うにはどのようにすればよいか考えていきたいと思い、自主性を育むキャリア教育をテーマにした。

(2) 研究の背景

働くということは、最終的には生徒自らが決めることであり、自分で考え納得する必要がある。しかし、現在生徒たちが育つ社会環境は変化しており、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等、様々な要因が生徒たちの将来の捉え方に大きな変化をもたらしている。また、理想とする大人のモデルが見付けにくく、自らの将来を考えることが難しくなっている。

また、社会環境の変化は心身の発育にも影響が出ており、具体的には「人間関係をうまく築くことができない」「自分の意思で決定できない」「自己肯定感をもてない」「将来に希望をもつことができない」といった生徒が増加している。

実際、高校生が進路を考える際、その 48.7%が「自分がどうなってしまうのか不安になる」と答えている。また、高校２年生の 38.2%が将来就きたい職業について「ない」「考えたことがない」と回答している。(社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会株式会社リクルートが平

成19年に行ったアンケート参照)

変化する社会の中で子どもたちが希望をもって、自主的に自分の未来を切り拓ひらいて生きていくためには、社会環境の変化に対応していく力と態度を育てることが不可欠である。そのためには、

①日々の教育活動を通して、学ぶ面白さや挑戦の意味を子どもたちに体得させること。

②社会体験を通して社会への関心を高める等、社会との関係を学ぶ体験をする機会を与えること。

③社会への関心や、自分の可能性を考えるきっかけを与えること。

などの働きかけが重要だと考えられる。

では、なぜ「自主性」が必要であるのか述べていきたいと思う。自主性がある教育とは、生徒が自らの意思で、学習することに興味を持ち、自分が何を身につけ、それをどう活かしていくかを試行錯誤しながら学習していくことであると私は考える。キャリア教育には「4領域8能力論」というものがあり、これは職業的(進路)発達にかかわる諸能力を「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4領域に分けた考え方である。この領域はそれぞれ2つの能力に分かれている。「人間関係形成能力」は「自他の理解能力」「コミュニケーション能力」、「情報活用能力」は「情報収集・探索能力」「職業理解能力」、「将来設計能力」は「役割把握・認識能力」「計画実行能力」、「意思決定能力」は「選択能力」「課題解決能力」に分かれている。これらの能力は、自分の意思や興味・関心と深く繋がりがあると考えられるため、生徒の自主性が育まれるキャリア教育というものが必要となる。

2. 事例研究

前章で述べたように、自主性を育み、生徒が自らの意思と判断で学ぶようなキャリア教育をしていく必要がある。そのため、生徒が自ら考えるようなきっかけや、「働くこと」に関する知識を得られるような学習を行う必要がある。そのために、生徒たちに手順、計画の立て方、目標の作り方を示す必要がある。そのため、取り組みの最初の段階に時間をかけ、丁寧に指導をする必要がある。

ここで埼玉県立浦和高等学校の実践例(平成20年度)を元に、どのようなプランが効果的か考えたいと思う。浦和高等学校では丁寧に、順序良く生徒が能力を身につけられるようなプランを行われている。(以下、浦和高等学校のHP参考)

(1)浦和高校の基本情報

浦和高等学校は、26学級、全校生徒約1050名(平成20年度)の普通科の男子校である。浦和高等学校では教育活動の理念の1つに、「生徒の10年後、20年後を見据え、真に国際

社会に適応できる人材を育てること」があり、長期的な視点で生徒の成長を図ることを目指している。そのため、授業による教科学習以外にも次のような学習機会を設定している。

(i) 大学の講義の聴講制度

放課後、近くの国立大学にて大学生向けの講義を大学生に混じって聴講する制度である。あらかじめ申し込んだ講義に半年間出席した生徒には、浦和高校において単位認定をするシステムとなっている。浦和高校は、「高校の枠にとらわれない、高度な知的刺激を与えること」をねらいとしているが、生徒からは「高校の授業内容が大学での研究にどう結びつくのかがわかって意欲が湧いた」「進路選択をする上で、大学の学部・学科の内容が理解でき、参考になった」などの感想もあり、非常に好評であるとのこと。

(ii) イギリスの姉妹校との交換留学制度

浦和高等学校はイギリスのパブリックスクールと姉妹校関係を持っており、10 日間程度の短期交換留学や部活動派遣、１年または２年間の長期交換留学といった制度を利用して、多くの生徒をイギリスに派遣し、また多くの生徒を受け入れている。この異なる文化との交流から浦和高等学校は「生徒が世界への目を開き、また同時に、自らの文化を見直すきっかけともなる」ことをねらいとしている。また、姉妹校に派遣された生徒への教育効果はもちろんのこと、短期交換留学の受け入れにおいては全クラスに留学生を配属するなど、全校の生徒にその教育効果が波及されるように工夫されている。また、長期交換留学生は国際的な大学入学資格であるインターナショナル・バカロレアを取得することによって世界中の大学へ進学することが可能であり、実際にケンブリッジ大学、ロンドン大学に進学し、活躍している。

(iii) 進路講演会・麗和セミナー

最高峰の知性に触れさせることをねらいとして、浦和高等学校ではノーベル賞受賞者をはじめとする学識経験者を招いての進路講演会を行っているほか、医師、弁護士、ジャーナリスト、研究職、芸術家など、各界で活躍する卒業生による麗和セミナーを開いている。これらの講演会は生徒の知的好奇心を大いに刺激し、講演終了後には質問の生徒の長い列ができることも多い。

上記の活動に加え、「総合的な活動の時間」を、生徒一人一人が能力を最大限に引き出し、自らの将来を展望することができるようサポートするための基盤とし、教育活動を行っている。

(2) 総合的な学習の時間

浦和高等学校では、総合的な学習の時間は平成 12 年度より現学習指導要領に先行して実施され、１年次に週１単位、２年次に週２単位のカリキュラムで実施している。年間計画

や内容等の企画・立案に関しては、進路指導部など関連する分掌・教科等と連携しながら教務部・年次団が行い、その実施計画書に基づいて全職員が生徒の指導を担当する。
総合的な学習の時間では「進路ガイダンス」「学習カウンセリング」「論文指導」の３つの柱を立て、それぞれのねらいをもって取り組んでいる。浦和高等学校が行なった具体的な取組からいくつか抜粋し、効果を考えていきたいと思う。

(i) 進路ガイダンスの具体的取組

(ｱ) 「マイプラン」

１年次の１学期に実施している。自己の「過去」「現在」「未来」を見つめ、「自分とはどういう人間なのか」「これから何をしたいのか、またすべきなのか」を考えさせる。ワークシートに記入する形式で進め、夏期休業中には、まとめとして原稿用紙５枚以上の文章を執筆させる。(浦和高校の事例から引用)

(ｲ) 「人物研究（モデル研究)」

１年次の１学期に実施している。内容は生徒が自分の将来を考える上で指標とするべき人物を選び、その生き方、業績などを調査・研究し、レポートを作成して、各クラスで発表する、というものである。生徒によって選ばれるモデルは、例えば「松下幸之助」「江崎玲於奈」「シュバイツァー」「本田宗一郎」「イチロー」「孫文」そして本校ＯＢでもある宇宙飛行士の「若田光一」など、バラエティに富んでいる。(浦和高校の事例から引用)

(ｳ) 「大学研究」

1年次の夏期休業中の課題としている。必要な情報を自ら積極的に得る姿勢を養うことがねらいである。生徒は各大学の研究内容、受験科目などの情報を自らの手で収集する。書籍やインターネットで調べる生徒、直接大学に出向き、自らの目で確かめる生徒などさまざまである。さらに、年次を問わず希望者を対象として、卒業生の支援のもと、大学の研究室等の訪問も行っている。実際に大学の教授から話を聞き、最先端の実験装置などを目にすることによって、生徒はあらためて向学心をかき立てられるようである。(浦和高校の事例から引用)

(ii) 学習カウンセリングの具体的取組

(ｱ) 「個人カルテ」の活用

すべての年次において、各自の学習計画や定期考査、実力考査の得点・順位、その反省など、学習に関する記録を「個人カルテ」に記入し、折に触れ振り返る機会をもたせている。考査をその時限りのものに終わらせることなく、学習に関する計画、実施、反省、次回の目標設定といったサイクルを確立させることがねらいである。(浦和高校の事例から引用)

(イ)「２者面談」

年間に３回程度、担任によってはそれ以上、すべての年次で２者面談を実施している。昼休みや放課後を使って、「入学後、うまく学校に適応できているか」「将来の希望職種、文・理の選択について」など時期に応じたテーマを中心にしながら、生活状況や学習状況を把握し、励まし、助言していく。このような生徒一人一人との直接の会話が信頼関係の醸成に大きな効果をもたらすようである。(浦和高校の事例から引用)

(iii)論文指導

(ア)「学問研究」

１年次の２学期から３学期にかけて実施している。生徒自身の興味・関心に従って自由にテーマを選ばせ、読書・研究の上、論文を執筆させる取組である。興味ある学問分野への理解をさらに深めさせることと、読書の習慣を身につけさせ、論文の形式を学ばせることがねらいとなる。具体的な方法は次の通りである。

・年次の教員が新書を中心とした「推薦図書」を出し合い、そのリスト（ 100冊程度）を生徒に配付する。

・生徒は「推薦図書リスト」から、あるいは他の図書から何冊かを選び読書をし、論文のテーマを決める。

・論文の書き方に関する参考書を読み、ワークシートを使いながら論文の型・書き方を習得する。（参考書には『論文の教室』〈戸田山和久・NHKブックス〉を使用）

・各自が決定したテーマに基づき、実際に論文（四百字詰め原稿用紙１０枚以上）を書く。

・優秀論文集を作成し、生徒に配付する。

(イ)「アドバイザーグループ（アドグル）」

２年次に実施している。本校における「総合的な学習の時間」の中核をなす取組であり、同じ時間帯に「総合的な学習の時間」を展開している１年次の担任団を除く全教員がこの取組にあたっている。教科の枠を超えた総合的な学習活動をグループ単位で行うことにより、生徒が相互に知的探求心を喚起し合い、共に思考力・判断力・創造力・表現力を伸ばしていく機会を持たせることがねらいである。内容としては、「アドバイザーグループ（以下アドグル）」内で調査・研究などの学習活動を行い、１年次で実施した「学問研究」の内容をさらに深めた形で論文を作成するというもので、具体的な方法は次の通りである。

・１年次の担任団以外のすべての教員がアドグル・リーダーとなり、それぞれの研究テーマを設定する。

・生徒は自分の興味、関心に沿って希望するアドグルに所属し、リーダーの指導のもとで調査・研究を行い、まとめとして論文作成を行う。

・作成した論文については自己評価表に基づいて自ら振り返るほか、グループ内の生徒同

士でも読み合い、他者評価も行う。

・リーダーから優れた論文を推薦してもらい、「アドグル論文集」にまとめ、生徒に配付する。

「アドグル」は年度を前期・後期に分けて、各期９～10回で実施しているため、生徒は年間を通して異なる分野の２つのアドグルに所属し、２本の論文を作成する。１年次の「学問研究」では比較的個人研究の要素が強いのに対し、２年次の「アドグル」ではリーダーの計画のもと、生徒同士の討議やフィールドワーク、実習など、大学のゼミ活動のような実に多彩な取組がなされているのが大きな特徴である。一般の授業では取り扱わないような専門的なテーマが多くあること、講座数が多いためアドグル１グループ当たりの人数が比較的少人数であること、などによって、リーダーである教員と生徒との関係、そして生徒同士の関係はより密接になっていく。グループ内の生徒は互いに論文を読み合い、良い点、改善すべき点などを指摘し合うことで、論文を読む力、そして書く力を養成していく。

3. 考察

前章のように、浦和高等学校の事例は実に計画的に生徒の興味・関心や能力の向上を図り、生徒が自ら学ぶきっかけと方法を示している。「４領域」の能力を身につけるには１年次からの丁寧な取組が重要である。取り組みの初期段階に時間をかけ、各取り組みで何を重視して行うか計画的に行う必要がある。前章で述べた取り組みで、何の能力を重視しているのか、また、どのように生徒の自主性を高めるかを考察していきたい。

浦和高等学校の各取り組みは非常に素晴らしいものである。しかし、「大学の講義の聴講制度」や「イギリスの姉妹校との交換留学制度」といった取り組みは全ての高等学校で実現できるわけではない。もちろん、そのような取り組みができれば有効的であるのは間違いない。高大連携を行える高校も増えているので、いずれは浦和高等学校のような取組も行える所も増えて欲しい。やはり１度や２度の高校生向けに作られた講義を受けるよりも、実際の講義を大学生と混じって受講するという経験のほうがより大学のことが理解できるはずであり、「職業理解能力」に繋がると考えられる。また、海外との連携も進めていくべきである。現在の国際化する社会で活躍する人材を育成するには、いかに生徒が世界に目を向けるようになるか、ということは重要であり、短期とはいえ留学生と共に過ごすということはお互いの文化を深く知るきっかけになると考えられる。新たな「コミュニケーション能力」を身につけられるであろう。海外の大学に進学できる手段を用意しているのも、より多くの可能性を生徒に見せることとなり、生徒自身が将来のことを考える材料となるだろう。

次に、このような教育資源を持たない高等学校で可能であろう取り組みを考察していこ

うと思う。

(1)「マイプラン」の考察

「マイプラン」は自己理解の第一歩として実に有効的な手段だと考えられる。この取組で浦和高校は、「今まで意識していなかった自分、気づかなかった自分」に気付くこと、「書くことそのものの力」に気付くことをねらいとしている。また、教員の生徒理解にも役立っているようだ。「書く」ということは重要で、文章で説明するためには頭の中で書くことをまとめなければならない。その際に自分のことを深く考えるきっかけとなる。「過去」自分が経験してきたこと、そのことから「現在」の自分がどのように形成されているのか、「未来」の自分はどうなっていて欲しいのか、文章化することで今まで考えなかったこと、意識しなかったことがはっきりしていく。ただ、未来の自分がどうなっていて欲しいのかということは少し想像しにくい生徒もいる。そのような生徒には、具体的に何年後と設定してあげたほうがよいと考えられる。また、自分のことが理解できても、自分に向いている仕事がわからない生徒もいると思われる。そのような生徒には、「13 歳のハローワーク (村上龍、2003)」や「あしたね仕事人」などの職業が調べられるサイトを紹介することも有効だと思われる。「マイプラン」では自分の将来を考え、実現する方法を生徒自身が考え・調査するためのきっかけとなり、「自他の理解能力」が身に着く。また、生徒が職業に興味をもつきっかけとなるため、あまり短時間で済ませるのではなく、生徒がじっくりと考えられるように何回かに分けて指導することが望ましい。

(2)「人物研究 (モデル研究)」の考察

「マイプラン」よりも少し具体的に、自分の興味のあることについて考えるのに適している。まず、モデルにする人物を選ぶが、どのような人物を選ぶか悩むことで自分自身の興味・関心について再認識することとなる。次に、選んだ人物のことを調べるために文献等を読むこととなる。このような初歩的な研究の手順を経験することで、２年次等に行う研究の能力を培っている。「情報収集・探索能力」を身につけるための最初の取り組みとなる。生徒が自らの職業について調べる際に必要となる能力であり、「職業理解能力」にも繋がる能力である。さらに、研究した人物の人生を自分と重ね合わせ、成功の裏にある苦労と困難から自分の人生に考えさせる。最後に、お互い研究した内容を発表させることで、プレゼン能力や、生徒同士の相互理解も深めている。また、どのような努力をすればどのような人生になるのかを考えるきっかけにもなり、人生設計の能力も身に着くと思われる。あまり有名な人物だけでなく、生徒があまり知らないような人物を調べるようなきっかけを教師が作ると、よりクラス全体の知識が広がると考えられる。

(3)「大学研究」の考察

「大学研究」と似たものに、「生徒に大学のオープンキャンパスに参加させる」といった

指導もある。どちらも大学に対する興味を持つきっかけ作りである。しかし、前者は自分で調べることで、生徒自身が必要な知識が得られ、目標や方針も決めやすくなる。もちろん、後者のように実物を体験することで得られる感動や、意欲の上昇も利点としてある。「大学研究」でも、可能であれば実際の大学に見学に行ったり、パンフレットを取り寄せるなどの方法を生徒に勧めてみると効果的であると考えられる。大学の学部・学科のことをあまり理解せずに、大学を選択する高校生は少なくない。このような取り組みを行うことで、大学と接する機会を増やし、学部・学科でどのようなことが学べるか生徒が調べようとするきっかけを作るのは効果的であると考えられる。また、高校での授業にも意欲的に取り組むようになるなど、効果が出ると考えられる。この取り組みは「計画実行能力」や「課題解決能力」「情報収集・探索能力」が身に着くと考えられる。

(4) 「個人カルテ」の考察

PDCAサイクルを身につけさせることが効果としてあげられている。生徒にPDCAサイクルを身につけさせることは非常に素晴らしいことだと思われる。しかし、全ての生徒が計画を立て、実行できるわけではない。勉強に対する苦手意識、何を改善すればよいのかわからない、といった原因が考えられる。このような生徒は個人指導していく必要がある。もちろん、全体指導でできることもあるが、個人指導で悩みを聞くことでしか改善できないことも多い。「２者面談」以外にも、生徒と多くの関わりをもつことが重要である。「計画実行能力」が身に着くと考えられる。

(5) 「学問研究」の考察

1学期から夏季休業までに培った興味をより広げ、深めていくこととなる。論文の執筆ということもあり、前章の例のように多くのことを調べていくこととなる。その経験はより自分の本当にやりたいこと探しにも繋がり、自分の夢がより具体的になっていくこととなる。自分の興味のあることの良い面だけでなく悪い面や、問題点も見えてくるであろう。様々な職業との繋がりも見え、「役割把握・認識能力」の導入になる。また、論文の執筆を行うことにより、論文を書くための基礎能力も身に着く。書き終えた後は優秀論文集が作られ、それを読むことで互いに刺激を受け、論文に対する意欲を向上させる。

ただし、多くの新書から推薦図書を選ぶなど、非常に教員の負担も大きな取組であると思われる。また、おそらく初めて書くであろう論文の書き方を指導しなければいけず、少し難しい取り組みである。「マイプラン」や「人物研究」で生徒の文章能力や「情報収集・探索能力」がどの程度向上しているかが鍵となっているであろう。しかし、確実にこの取組は生徒の意識を向上させるので、他教員と連携し、役割分担を行って実現させたい。個別指導を行い、途中経過の確認をしておくのが重要であると考えられる。生徒のモチベーション上昇のために、前年度の発表の様子をビデオで流したり、優秀作を見せるのもよい

と思われる。

(6) 「アドバイザーグループ（アドグル）」の考察

1年次よりも興味をもったことを深めていく。例えば、「現代の医療を取り巻くさまざまな問題について考察する。例えば、医療過誤訴訟、脳死、生体間臓器移植、遺伝子治療、等々。新聞記事の切り抜きによる資料収集や発表、テーマ別研究、論述等を課す。この分野に深い関心を持っていることが求められる。」(浦和高等学校の事例、資料４より引用)等のテーマがある。教師がテーマを設定しているとはいえ、生徒自身が興味を持ったものから選ぶため自主性は強い。自分が特に何を調べたいのか考え、話し合い決定するため、「コミュニケーション能力」や「選択能力」が身に着く。また、より深い知識が得られ、生徒の夢はより具体的になっていくと考えられる。現在、何が問題となり何が求められているかを考えるため、「役割把握・認識能力」も身に着くと考えられる。1年次で経験した論文執筆の経験を生かし、より高度な論文の作成が可能であると思われる。この能力も将来役に立つであろう。

当然であるが、１年次の「学問研究」を行い、丁寧な指導をすることが必要である。生徒にとっても難易度の高い取り組みであるが、自分の将来をより具体的に考えることで「計画実行能力」にも関わってくるため、しっかりと行えるよう準備したい。

4. 研究の成果と今後の課題

以上のように、高等学校で行える効果的な活動は多い。生徒の自主性を育むためには、第二章で述べたように生徒たちに手順、計画の立て方、目標の作り方を示す必要がある。浦和高等学校での各取り組みにはそれぞれ狙いがあり、身につけたい能力は異なる。しかし、各取り組みはそれぞれ体系的にまとまっており、生徒たちの自主的な学びをサポートしている。他の高等学校でキャリア教育を行うとしても、浦和高等学校のように「マイプラン」や「人物研究」のような簡単な取り組みから始め、少しずつ能力を身につけさせ、同時に興味を持たせていく必要がある。もちろん、入学直後でも生徒の能力には差があるので、多くの生徒が満足のいくような結果を出すためには、時間をかけて一つ一つの取組を行う必要がある。現状の高等学校ではそのような時間を取ることのできない所もあるだろうし、少し学力に難があり、論文執筆を行うために多くの時間指導行わなければいけない高等学校もあるだろう。しかし、自分の本当にやりたいことが発見でき、高等学校の勉学が必要であると生徒が理解したならば、生徒の勉強に対する熱の入り方は変わる。これからのキャリア教育は、いかに取り組みの難易度の幅を拡げ、学校の状況に合わせて体系的な取り組みを行えるかが課題であると考えられる。

もちろん、本論文で紹介した取組は教師が準備することも少なくない。今後、より良い

キャリア教育を行うには教師が協力し合い、各人取り組みのねらいや必要な能力を把握してお互い協力する必要がある。教師が一丸となり取り組めるようなチームワークが求められるだろう。

【参考文献】

あしたね仕事人
http://j.ashitane.net/
埼玉県ホームページ―県立高校「キャリア教育」指導資料
http://www.pref.saitama.lg.jp/page/kyaria.html
文部科学省「キャリア教育」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/index.htm
吉本圭一(2012)インターンシップと体系的なキャリア教育・職業教育広島大学高等教育研究開発センター